

会員の著作紹介

大覚寺大沢池景観修復プロジェクト
—古代と現在をむすぶ文化遺産—

真板 昭夫・河原 司 編
春田 章博, 川口 俊雄 他著



A5判・224頁
価格：2,730円（税込）
世界思想社
2009年12月発行

「美しい景色は人がつくり上げるものです。この当たり前のことに1000年たった今、ドキリとするのはどうしてだろう」この本の対象となった京都・嵯峨にある大覚寺大沢池は、庭園としての美しさと自然景観としての美しさを兼ね備えた自然系文化遺産である。冒頭の記事はJR東海が「そうだ 京都、行こう」キャンペーンで、嵯峨嵐山へのコピーとして、大沢池を背景に語られるナレーションである。嵯峨天皇と空海が築造し、1200年もの間維持され、日本最古の林泉として存在する大沢池をよくいい表しているように思う。

この本は、大覚寺大沢池景観修復プロジェクトについて書かれたものである。

執筆者のひとりが対談で大沢池を訪れた際、水草管理のために導入したソウギョという外来種の食害で、池の風景が危機的な状況になっていたことがプロジェクトの発端であった。対談していた大覚寺執行長の坂口博翁が「昔の風景を取り戻してください」というと、同席していた作家のC.W.ニコルはいった。「面白いよ、やってごらんなさい…。さっそく、動物・植物・景観管理など各分野の研究者・技術者が集まりプロジェクトが発足した。

プロジェクトは、はじめから困難をきわめた。景観修復には根拠が必要であるが、1200年前の池の様子を残

す資料は見つからない。そのなかで、華道嵯峨御流（さがごりゅう）の、自然の織りなす景観をいける「景色いけ」の技法のなかに、大沢池を表徴する「庭湖の景」があることを知った。それを目の当たりにしたわたしたちは驚いた。いけばなには環境を表現する生態学や景観など科学・技術としての視点が備わっていたのだ。景色いけを分析し、その自然観と考え方を大沢池の景観修復に応用した。

大沢池は庭池としての文化的役割と、嵯峨嵐山の水田地域の溜め池という実利としての機能を有している。このプロジェクトは、嵯峨御流を発祥させ、大覚寺のさまざまな行事を行う庭池であり、かつ溜め池という多くの意味と複雑な利用体系を持つ大沢池を、科学的・技術的な情報が乏しいなか、手探りで景観を修復させたものであり、この本は、文化遺産をめぐる論議と修復にかかわった技術士の活動とプロセスを書いたものである。また、プロジェクトには延べ1,500人が、どろんこになりながら景観修復・維持の活動を行った。この本にはその熱い思いと苦勞の軌跡が記録されている。

会員諸氏には、ぜひ、本書をお読みいただくことをお願いするとともに、3,000本のハスが咲き乱れるようになった大沢池を訪れていただきたい。その美しい景色は「人がつくり上げたもの」なのです。（敬称略）

著作にあたって

このプロジェクトでは、生きものやランドスケープの技術士としてかかわりました。カウンターパートの嵯峨御流の方々とのディスカッションをしていたとき、いけばなの技法やきまりごとに科学的・生態的な妥当性があることにびっくりしましたが、その一方で、嵯峨御流の方々には、いけばなの技法は、独りよがりになりがちで、社会にどういう意味があるのか？自問していたようで、わたしたちから、科学や技術と密接な関係があることを知らされ、自信を回復したようでした。技術士が、さまざまな人たちとかかわり、技術的にささえることは、とても良いことなのだと思います。

この本は、文化・芸術的なトーンで書かれていますが、読み進むうちに、技術がかかわっていること、技術士が関与したことがわかるようにしました。

大沢池を実際に造成したのは秦氏と呼ばれる渡来の技術者とされています。1200年前の秦氏にこの本を捧げ、「技術士としての責任を持って風景を修復しました」と報告したい気分です。

春田 章博 (はるた あきひろ)
技術士(建設/環境/総合技術監理部門)

(株) 環境・グリーンエンジニア
e-mail : haruta@ege.co.jp

